

日本書紀傳

廿七卷下

和書
一〇五二號

二十九

内閣文庫			
番號	和	10522	
冊數	156 (98)		
函號	特	85	1

海一五六八〇



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

文庫部省印

清印
文庫部省印

ハ其小山神母川神母と云意あり又其二十天地

毛縁有

許曾と有也天地神毛縁而有許曾と云義也

古書例然り

今も天皇尊と奏す事を京師に奏す

詐ふ人の類不知こも人の詐ふ事江戸子

常子云て異と為る是あり○此所謂草薙劔兵ハ

正書曰ふ此所謂草薙劔也と有を此子ハ今字の加ハ

れるのみかり

初五十猛神天降之時多將

樹種而下然不殖韓地盡以

○日本書紀傳二十七

○四十六

丙一六八三號

持歸遂始自筑紫凡大八洲
モチカヘリシツセニ ハシメテ ヨリ ツク シ スベテ オホ ヤ シブ
 國之内莫不播殖而成青山
クニ ノ ウケ ノ ナカリ ズトニ イ キ ウエ テ ナサ アラ ヤマト
 焉所以稱五十猛命爲有功
キ コ ノ ユエ ニ タ ヘ マリ テ イ ソ シ ケル ノ ミ コト ヲ マ ラス イ サ ヲ
 之神即紀伊國所坐大神是
ノ ヤ ミ ト ノ ス ナ ハ キ ノ ク ニ マ ス オ ホ カ ミ コ レ
 也
ナリ

此初五十猛神天降之時と有ハ上文の緯子て即右
 日是時(五)素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國と
 有ハ其御時の御事ト渡ラセ給ヘラ田巳子此卷首子
 委トク論メ云ルガ如ク然ルハ此の御消息をも右子
 列ハ書トさせ給フ可クメヲ異事ノ様ト別ト書出サ
 レタルハ如何ト云子上子其御天降の初後を混同ト
 為ルレタル其ハ姑ク別の事ト一テ右子ハ御父大神
 の彼八岐大蛇を退治させ給ヒ草薙劔を得させ御在
 ト坐テ天神ト奉ラセ給フ御事を書トて謂ルハ經子
 ト有ケレバ此御事を書ト可キ序無リト故子其初

の御事を殊更に書出させ給へり一者ありけり故纂
疏に初之言謂前此進雄尊天降之時相習其子五十猛
神而來至也とい注させ給へりけり或説は天降とい
云際より降給ふ
事ありと云て上より此を別事の如く云ふは甚
委しうしう若て此は多將樹種下然不殖韓地盡以持
歸遂始自筑紫九大八洲國之好云云と有る下字は上
に降到於新羅國と有る應きよて次は謂ゆる大八洲
國は初て天降らせ給へる御事を申し又其韓地と云
は後子渡到らせ御在り坐けり其新羅國を云ふは右
十九に注るが如く其降到字は降於大八洲國而到於

新羅國と云意あり事此は持歸字にて知られたる又
遂始自筑紫と有て其初渡り御在り坐けりも筑紫
より物為させ御在り坐けり程を明くめ奉り知べく
あり有けり然して此は九大八洲國之好莫不播殖而
成青山焉と有るハ次の一書の傳ふを合せて考ふ
其初度は天降り御在り坐けり間の御事ならず彼
敷川上の御事よりハ曼以前に在つる故事あり由
上は已に論め云ふを以て知べき者ありけり故上文
は東渡と云字は此は持歸と有る一事ありけり即
筑紫に歸渡らせ給へる御事ありけりハ續きてハ有

れども到出雲國敷川上所在鳥上之峯と有ハ上章第
三、一書ハ所見たるが如く御父大神の御降見の供奉
の再天上子參上らせ給ひて還降り御在ハ坐ハ来下
せ給へる御時の事多り此事傳二十二卷より始て往
こハ云々事ハ有れども思違ハ混テ可ううずさむ
若の如く上ありと事ハ別ありと見ゆ物うらな
同時の御事あり者あり然れども上ハ經あり此ハ緯
あり唯其差別の○初五十猛神天降之時ハ右ハ是
時素戔嗚尊帥其子五十猛神ト有る其御時ありけハ
ハ御父大神と共ニ物為させ御在ハ坐けり事此ある
初字より著明くある有けり諸此御天降ハハも上章

第三、一書ハ既而諸神噴素戔嗚尊曰汝所行甚無頼故
不可住於天上亦不可居於葦原中國宜急適於底根之
國乃共逐降去于時霖雨也素戔嗚尊結束青草以為笠
蓑而乞宿於衆神衆神曰汝是躬行濁惡而見逐譴者如
何乞宿於我遂同距之是以風雨雖甚不得留休而辛苦
降矣と有る此御辛苦の時ハ共ニ五十猛神ト此御國
子ハ御天降坐けむを御父大神の御事ト連坐させり
ハ御在ハ坐て共ニ韓地トハ渡らせ御在ハ坐けり子
ころハ有けり故此ハも上ニ其神逐ハハの御事を先
書して此所ハ初字を殊更ニ加へさせ給ひて其御

事思のりく託さず給へりけり纂疏初之言謂前此也注させ給へ
る如く立復りて此より以前の事を云むとてハ必此
字を置る事にて已に瑞珠盟約章にも此例有る事
傳十五卷六十八○樹種ハ次の一書ハ夫歌ハ十木
種と有ハ其ハ口訣も木種菓樹等也と有が如く其歌
ふ可き限の衆菓を云るを此ハ凡ての樹種を云る小
て其物に依て或ハ種ふ又ハ苗あるを以取惣て云
ある可りし事下文に凡大八洲國之内莫不播殖而
成青山焉と有を以て知べきなり纂疏に樹種可樹藝
草木之種子也諸穀諸菜諸菓實桑麻等在此中蓋備饑
寒衣食之用器助之用下所謂官舎等是也注させ給

へる多む實然御説ふるふて已に傳二十六二百
下注るが如く出雲風土記に大原郡高麻山略古老
傳云神須佐能表御子音播佐草昭命是山上麻蔕初故
云高麻山略ふど見えし事此一事を以ては天上の諸
種を將下らせ御在し坐て殖播こり給へり御事
著明く又此素戔鳴大神五十猛神の御功業を持別さ
せ御在し坐て延弘の御事御在し坐けむ御事をも見
奉り知べき者多む又四神四生章第十一書に見
えて已に天上ふて桑を殖させ御在し坐て養蠶の御
事亦御在し坐けら此御時ころハ共は將下り

傳子八卷下三十一
有り考合す一

世御在坐けむ事傳二十八
十 爪津姫命の御事
就て合せ説てむう
已も傳十四卷二百九下注
如く此神の御在坐
す紀伊國伊都郡と云有糸郡と云義ありしを
同郡と兼原と云二郷名の有をも亦由有て通えたり
○將而下此にてハ五十猛神一柱のこの御事と見
ゆ物う御父大神と共將下らせ御在坐ける
かり其の上は是時素戔嗚尊帥其子五十猛神と有
て著明きが上次の一書にも干時素戔嗚尊之子號
曰五十猛命妹大屋津姫命次爪津姫命凡此三神亦能
分布木種と有る亦字ハ素戔嗚大神を主と為て云ふ
文義あるも心を著て考れば自然に於て隈無くあむ

五十猛神をハ韓
國伊都郡と申
す身三言より
彼大蛇を退治
す給ふ御劍の名
を蛇韓劍之劍
と云見之且

有べりりける○韓地ハ上降到於新羅國居曾尸茂
梨之處と有ハ先其落著せ給ふ地多るが此所御在
坐て彼邦を建させ御在坐ける程の御言ハ實
其空虚ある處の多在けるを見行御在坐て然ふ
む詔給ハ一ヶ即其地の名とい成れるあり次の
一書ハ素戔嗚尊曰韓郷之島是有金銀云云と詔給へ
るも此國御在坐一間の御言より有ければ當昔
已然る稱有し事をも知べく又古事記ハ韓神と申
す御名の御在坐も神代りの御事あるふを思
合するも彼韓字の音より取れりハ非ずて我が神

代よりの古名あり事云も更あり一倭崇神天皇七
年御紀に所見たり神の御誨に亦有海表之國自當歸
伏と有る其事を合せて並仁天皇二年御紀の細書に
御間城天皇之世額有角人乘一船泊于越國筭飯浦故
号其處曰角鹿也問曰何國人也對曰意富加羅國王之
子略中傳聞日本國有聖皇以歸化之略中略是時遇天皇崩使
留之仕活目天皇建于三年天皇召問都怒我阿羅斯等
曰欲歸汝國耶對諾甚望也天皇詔阿羅斯等曰汝不迷
略中是以改汝本國名追負御間城天皇御名便為汝國名
略中故号其國謂弥摩那國是其之緣也と有る此弥摩那

を又崇神天皇六十五年御紀に任那を作りに在鷄林
之西南と書されたり倭其任那の舊名意富加羅國不
る時ハ元其一隅の名ありを始て歸化の國ありに依
て其稱を押しめて三韓に亘り終に外蕃萬國の名と
ハ成れり者一應ハ見ゆめり物あり必其然しも非
りけり已に神代より神名ハ更にも云す韓地と云ひ
韓郷之島と云ふ古名の有るハ其事とも委任難
かるを猶熟思ふに其意富加羅國と云ふ意富ハ本よ
り大字の義ふれば他に加羅國と云ふ有る其に對ハ
て然云成す事云も更ありを神功皇后四十九年御紀

より次こ子加羅國と云も有れども其も猶意富加羅國の事と聞ゆれば猶今朝鮮の地方を惣て韓地と云けるを右ハ外國より歸伏奉る始あり一ヶ故子殊更に意富の言を當昔子稱させ給へり一者ありけり故(其)神功皇后御紀子三韓の稱有り其五十年子海西諸韓の言有て終ハ萬國の稱呼とハ成れり者ありけり但欽明天皇二十三年御紀子一本云二十一年任那滅焉惣言任那別言加羅國安羅國斯二岐國多羅國率麻國古嗟國子他國散半下國を食國稔礼國合十國と有る其十國の中子加羅國と云も有ハ右の意富加羅國の古名にせて僅ハ一國の名に遺れり事右に云を以て考ふ可し又此字羅國ハ彼阿羅斯の名に因れり國名ならずむハ由無れば其處ハ物為此云若て韓地を歌子詠

乃ハ繼体天皇二十四年御紀子目頼子初到任那時在彼郷家等贈歌曰柯羅屢你鳴以柯你輔后等所略と有を釋ハ韓國也謂任那也と見え欽明天皇二十三年御紀子坂本臣^中其妻大葉子亦並見會愴然而歌曰柯羅^城俱尔能基能陪你陀致底^之略と見え又或有和日と云も有を釋ハ韓國也と注されたり此ハ新羅國を云り万葉十五丁^{十二}小可良久尔二和多理由加武等又^{二十}須賣呂伎能等保能朝廷等可良國尔和多流和我世波又^{二十}年加之欲里伊比祁流許等乃可良久尔能可良久^{六丁}毛已許尔和可礼須留可聞十六^{三十}丁^{三十}小韓國乃虎云

神乎ふど有ハ何ルヲ謂ゆる三韓の地を唯大凡ト云
カあり十九三十一ト春日祭神之日藤原太后御作歌一
首即賜入唐大使藤原朝臣清河参議從四位大舶尔真
握繁貫此吾子乎韓國邊遣伊波敵神等又四十一閏三月
於衛門督大伴古慈悲宿祢家餞之同胡麻呂宿祢等歌
韓國尔由伎多良波之氏可故里許牟麻須良多家乎尔
美伎多氏麻都流ト有ル此二共乎韓國トハ書ル物カ
ラ其詞書を見ル小唐國を指て加良久迹トハ云ルカ
リ傳二十六九十ト韓神の下ヲ引ル大倭神社注進状ト
古語外國云韓也ト云ルハ然ル言ハて其加良ト云称

ハ右ト注ルガ如ク彼三韓の地より起りて終ルハ萬
國の全を云ふ受張ルヲ惣称トハ成ル者多クけり
其ハ神代ト素戔嗚大神五十猛神彼地ト渡り御在ト
坐トより始て萬國を建させ給ひ又後小大己貴少彦
名二神を韓神ト申して彼地より始て萬國を巡歴ト
セ御在ト坐トて悉くト經營トルセ御在ト坐トルバ自然
ニ其名を及トびて四夷八蠻の惣称ト成ルトけむハ
實ト謂ル有ト事トト云ハ所思トえたりトけハ中古より
と書て加良夜麻ト登ト云ム加良ハ彼唐國を云トテ今ト也
天下一同の通言トあり是あり又神功皇后四十九年御
紀ト子屠南蛮ト有ハ韓地の内の南方を云トテ凡トての
南地を云ト非トルトども蛮字を用いて加良久迹ト訓トル

其廣く外國の皆から
加良と云ふ故ふり 名義ハ空虚カラの謂ふもや其
ハ天孫降臨章ヲ驚完之空國自願丘覓國行去と有る
古事記ハ於是詔之此地者向韓國真來通笠汝之御
前而朝日之直刺國夕日之日照國也故此地甚吉地詔
而と有て空國カラニを韓國カラニと換て吉地ヨキトコロの及と為るはた
是あり又此ハ不殖韓地盡以持歸遂始自筑紫凡大
八洲國之内莫不播殖而成青山焉と有る彼を空虚カラ
為て此を豐饒トヨクニ成し給へるなり次の一書ハ韓郷之
島是有金銀若使吾兒所御之國不有淳室者未是佳也
と有る彼を虚カラ為て我を實トヨク為させ給ふ可き神策

ふて御在し坐あり其ハ天下ニ在し有ゆる萬國ヲ御
恩頼を令蒙給ふ大神等の御上ふ於て然る勝劣の差
異無く同ト状カタとありハ若しさせ給ふ可き御事と誰
も然思いつ可き物ありう其ハ神の御定を得知ぶ
る僻心あり者あり然らハ此大八洲國ハ一も皇御孫
尊の長御世の遠御世ハ所知食す大御食國ハあり有
ければ海表あり萬國ハ事物器械共ハ我が利用と成
る可き事を作出て自國の用を後小して必先貢奉る
可く皇神等の授させ御在し坐ける御事ありければ
自然小して空虚カラと云ふ言の意あり見ゆらハ海
官

遊行章第一書ニ故尼持身之幸弓入山覓獸終不見
獸之乾迹と有る乾迹を如良登と訓も空一と云也
瑞見さう由は其幸無を云あり又祐山と云山本
の或説は韓國の宝國の略ありと云らハ神功皇后御
犯子依て云るあれども其ハ別々稱美る物有て云意
及て通證ニ今按古事記延喜式作辛國万葉集云可良
久尔能可良久毛言渡海幸吉方可到也と云るハ國名
コハ由無げありや然れハ皇國の豊饒ありと反て空
虚と見ら我説や○不殖ハ樹種を將下さ御在り坐
て彼地ニ渡らせ御在り坐しうども先此地より殖さ
せ御在り坐むして未其事を始させ給はさるなり但
上二十子云るが如く其曾尸茂梨の茂梨ハ謂ゆハ森
の事と聞ゆれに當時姑くハ其地ヲ移し置させ給

り添抄よりかく一日も飲へず有用の樹を盡し皇國に殖させ給はし御心坐し故に先此方不殖

や給い其跡を外國
に殖生し給はむと
の御所置し渡らせ
給はし御事なりし

二字を合せて計
空基等久し訓
ハ一即

法原宣賢御説
を引し

ひけめども其ハ唯樹種を養いせ給ふのこして並て
ハ其韓地ニ少くも殖させ給はざりし御事次ふる盡
以持歸のの語にて知るこあり此殖の言ハ傳十四百
十五子注リ○盡ハ四神出生章第十一書保食神の
御身より種この種子の成れる所ハ天熊人悉取持去
而奉進之と有る悉字ニ同トくして其有ゆり數を盡
して皆あがりある事云も更あり然るを此字上ハ属
て不殖韓地盡と續けて都久須と訓ハ非あり通證ハム
盡字當讀古登語等久今按不殖韓地一句盡以持歸一
句舊讀不是と云れたるハ實ハ然ら言ありけり若舊
讀の

全日本亦右の如く
鴨社之主の大八洲
引れたるも然る
はれは已く著し
一人有けり

如くありむは韓地は殖盡さずして其餘を此方子
持歸らせ給ふ事と成て次の一書の趣はも大に乖け
る者○持歸は其始天上より此大八洲國は天降らせ
給ひけれども上章第三一書は所見たるが如く國內
の衆神共は同トく距奉りて此處に留め奉らざりし
は彼地は流離ハルと渡り往坐しければ其混れし
其天上の樹種ふどを如何ハ播殖させ給ふ御暇の御
在し坐む故其樹種を携へて持往せ給ひけり故に
此持歸とい有あり下は始自筑紫凡大八洲國と有
を以て此大八洲國より往渡らせ御在し坐けり御事
迹を多し知べりけり然れば此持歸の字多し此一

書中よ於てハ甚眼と有る字ふふて此字より活用
して大神の御天降は初後有を知り其事實を詳く小
為は至れり者ありけり輕く見過す事勿れ凡て往
來を知り行を以て歸を知り其より自他を考合せて
世人此神典の幽事を測り奉らる事ありけれ
無きハ如何○始自筑紫ハ韓地より直に筑紫に歸
渡らせ給ひ打置ずして其地より始て物為させ給へ
る由あり口訣は肥前國西南沖有五十猛島と云は是
らし其始て歸り渡者せさせ御在し坐けり地ありり
らし自然其神の御名を負奉れりあり可うけり谷
重遠が蓋彼神始下年之地歟と云は然し有ぬ可き

御事あり、故筑紫より始て東に往巡りせ給へり
趣多し、意を得て考らば、肥前風土記に杵島郡縣南
二里有一孤山、從坤指艮、三峰相連、是名曰杵島、坤者曰
比古、神中者曰比賣、神良者曰御子、神一名軍神、動と有
り、此杵島や木島と云事、始自筑紫云々、と物為さ
せ給ひ初けり、地有けむ其御子神の下に、一名軍神、動
則兵興矣、と有る、五十猛神の御名に似着て聞ゆれば
姑く其事と定めて思及ぶす、其比古神比賣神ハ
一も御父攝御氣野神御母大夜乃女命多可、若て
出雲風土記に飯石郡來島郷郡家正南、三十九里、^{復自}級多

麻都美命坐故云支自真神龜三年即有正倉と有り、此
御名も杵島より出たり、改字、末島木島津持命と云事、ふ
れば必此五十猛神に御在り坐へき御事申すも更ふ
り、和名抄郡名に肥前國杵島岐志郷名小同郡杵
島木之と有る是あり、又同國に基肆郡基肆郷有る同
抄に木伊と注せりも、紀伊國の名に等しく、彼杵郡彼
杵郷有る曾乃岐と注せりも、由有けり、事共あり、や
但右の風土記ハ仙覺が万葉抄に引り、今傳ハ
肥前風土記ハ異あり、其書に云く、杵島郡昔者、嚮
日代宮御宇、天皇巡幸之時、御船泊此郡磐田杵之村、
時從船、御之穴、冷水自出、一云、船泊之家、自成一島、
皇御覽語、群臣等曰、此郡可謂、杵島郡、今謂、杵島郡、
之也、と有り、然れども、其景行天皇十(七)八年、御紀に、
杵

日本書紀傳二十七
〇五十八

島山と見えたり其の後名を始に巡りたりと云
有る上ハ彼梯戎の事ト一説ト為り又同記ト基肆
郡昔日纏白日代宮天皇巡狩之時御筑紫國御井郡高
羅之行宮遊覽國府霧覆基肆之山天皇勅曰彼國可謂
霧國之因號基肆國今以為郡名ト有ハ霧國ト基肆
國ト訛れハ御言の添て一ト成ルヤ又彼杵郡昔
右の霧國の御言の添て一ト成ルヤ又彼杵郡昔
日纏向日代宮御宇天皇誅滅球磨贈於之時云々神代
直捧此三色之玉還献于御于時天皇勅曰此國可謂眞
足玉國今謂彼杵郡訛之也ト有ハ實ト有ハ古事ト有
ハ本ト有ハ論無キ事ト有ハ余リト迂遠ト有ハ事ト有ハ若
くハ此ト有ハ木ト有ハ又筑後風土記ト筑後國者本筑前
國合為一國昔此兩國之間山有峻狹坂往來之人所駕
鞍韉被磨盡土人曰鞍韉盡之坂三云昔此坂上有鹿猛
神往來之人半生半死其數極多目曰人命盡神于時筑

紫君肥后占之今筑紫君等之祖獲依姬為祝祭之自尔
以降行路之人不被神害是以曰筑紫神四云為葬其死
者伐此山木造作棺輿因此山木欲盡因曰筑紫國後分
函為前後ト有て此ト二説有る共ト一時の事ト有りけ
り私記ト一云此地形如木兔之体ト有て二ハ右の鞍
韉盡の説ト有り故其鞍韉盡の説ハ此ト神代ト有り以來
鹿猛神の御在ト生けト故ト馬あがト往來ト人有レ
ハ必其無禮きを咎めさせ給ひて命をも取せ給へト
多ク次ト半生半死ト有ハ其事を釋せる如クト有
ハ落又ハ死ト為けト云ト有り後の説ハ其亡ト有

此山の材を以て棺輿を造り此山に埋めけり由
 して其死者の夥しきを云り然れに其中に云る人命
 盡神と云る是筑紫の本説にて鞍韞盡之坂又山水欲
 盡の説ハ其に就て出来れり者ありて此彼別あり故
 事の有りしハ非ざるに依り諸右の麻猛神ハ上子引る肥
 前風土記に軍神と有る類して五十猛神と申奉る意
 應に合者不り記傳五十一右の文を引て筑紫神
 ハ神名式に筑前國御笠郡筑紫神社名神有り是あり
 可しと云れき貝原氏の和尔雅に筑紫在御笠郡原田
 村五十猛命相殿室満明神と有り其筑紫神社と給

大隅國筑紫郡
 國守嘉平神社式
 子見たりハ五十猛
 神少可事下比
 在丹波國柴田郡伊
 達神社の下の云
 と見可一故

隣村小筑紫村と云有り土人云り右の相殿室満
 同郡室門神社名神大と有る是あり今其山の一名
 室満山と云れ其神を故有て此に祀れり可
 海神の御女と云り神を玉依姫命と申傳たり諸書に
 其由傳十五卷四百三十一に注せるが如し
 故其三女神ハ一後度子御父大神と共に出雲國
 川上にて天降り御在し坐けるを五十猛神と再上りて
 共天降らせ給へに其御事と就て七並び御在し
 坐す事大由斯る所申すや縁けむ世ハ筑紫州
 有名高き大樹多あり景行天皇十八年御紀に到筑紫
 後國居於高田行宮時有僵樹長九百七十丈焉百寮踏
 其樹往來時人歌曰阿佐志毛能弥擬能佐烏磨志魔幣
 菟者弥伊和哆羅秀暮弥開能佐烏磨志天皇問之日

是何樹也有一老夫曰是樹者歷木也曾未僵之先當朝
日暉則隱杵島山當夕日暉覆阿蘇山也天皇曰是樹者
神木故是國宜号御木國と見えたる此歴僵樹の事を古
老と問せ給へるを以て其僵れたりし甚上代あり
し事知るるを時人も亦概能佐烏廢志と云るを以て
も古くす御木と云来れりを知り神木と詔給へる
大御言に依て神代の遺木あり事を思ふ可し又此木
の事と就て私記に案筑後國風土記云三毛郡云昔
者棟木一株生於郡家南其高九百七十丈朝日之影蔽
肥前國藤津浦多良之峰暮日之影蔽肥後國山鹿之郡

荒凡之山因曰御木國後人訛曰三毛今以為郡名棟木
典棟木名稱各異故記之と有て其木の別を物く其高の同トキハ右の一傳あり可し肥
前國の杵島藤津二郡相隣り肥後國の阿蘇山鹿兩郡
相近キカシけり日の長短に依て蔽ふ影蔭も異あり物ふ
りけり此事の別ありし非ざり本國神名帳に三
毛郡正六位上大城神と有や其樹靈を祀れりしとて大樹神の
意に有べき又肥前風土記に佐嘉郡昔者樟樹一株
生於此村幹枝秀高莖繁茂朝日之影蔽杵島郡蒲川山
暮日之影蔽養父郡草横山也日本武尊巡幸之時御覽
樟茂榮曰此國可謂榮國因曰榮郡後改号佐嘉郡一云

又景行天皇十二年
御紀云御本^{本此川}
上云地名有^ハ御
砂即名^ハ聖前
上毛^加下毛^ト
有^ハ是^ハ其^ハ郷^ト
下毛^ハ御^ト有^ハ
古^ハ大^ハ有^ハ
此^ハ對^ハ也^ト
こ^ハ開^ハ

郡西有川名曰佐嘉川^中山川上有荒神往来之人半生
半殺^中略云取^二下田村之土作^一人形及馬形祭祀此神必有
應和^下略^ト有^ハ荒神之事又往来の人の半生半殺^ト上
云^ハ筑紫神の故事^ハ似^ハた^ハも若^クハ同神^トて渡
^レせ給^フが故^ト然^ル崇^ハハ^レく御在^一坐^トヤ又豊後風
土記^ハも球珠郡昔者此村有^ハ共樟樹^ト因^テ云^ハ球珠郡^ト有
^ハ唐橋世濟^ハが箋釋^ト郡南有^ハ山名^ハ共樟^ト一名^ハ断株^ト山高
一里許周廻二里余上平如臺相傳古昔有一大樟樹
高不知幾千尺其樹自僵倒土人伐之断株蟠振化為石
即此山也^ト云^ハら^ガ今^モ其僵樹の横^ハハ^レる山續^キ

塵添^ハ蓋^ハ長抄^ハ白
向^ハ回^ハ韓^ハ德^ハ生^ハ村^ト昔
苛^ハ差^ハ武^ハ別^ハと^ハ云^ハけ^ル
人^ハ韓^ハ回^ハへ^レ渡^レり^テ此
粟^ハを^ハ取^レて^ハ飯^トと^ハ進
たり^ハ此^ハ故^ハは^レ德^ハ生^ハ村
と^ハハ^レ云^ハふ^ハ上^ハ同^ハと^ハ記^ス
俗^ハ語^ハ謂^ハ粟^ハ爲^ハ區
兜^ハ然^ル則^チ云^ハ韓^ハ德^ハ生
村^ト云^ハふ^ハ蓋^ハ云^ハ韓^ハ
栗^ハ村^ト歟^ト云^ハ事^ハの
有^ハこ^ハ恐^ハる^ハ此^ハ御
時^ハの^ハ御^ハ事^ハを^ハ傳^ヘ
たり^ハ者^ハあ^リや^ハい

凡五里許^トも有^ハら^ハむ^ト云^ハり右等の大樹共ハ必^トも
五十猛神の殖させ給へり^トふハ非^レれども此大神の
筑紫洲^ト御在^一坐^トけ^レ昔思^ハめ^ハら^キ就^テ今引^出
て^ハ云^ハふ^ハの^ハ但^レ此^ハ物^ハ所^レ見^タる^ハの^ハこ^ハろ^ハ有^ハけ^レ然
げ^ハあ^リを^ハ正^スく^ハ書^キ載^ズて^ハ土^ハ人^ハの^ハ口^ハ傳^ハり^ケる^ハ
は^レる^ハも^ハ此^ハ彼^ハ聞^タる^ハ事^ハも^ハ有^ハら^ハむ^ト煩^ハハ^レけ^レる^ハ書
さ^ズて^ハ○凡大八洲國之内^ハ右^ト始^レ自^レ筑紫^ト有^ハて韓
地^トより初^テ其地^ト渡^リ著^セ御在^一坐^トて其^ハより大八洲
國^トを往^リ巡^リせ御在^一坐^トて樹種を播殖させ給へる^ハ不
り故^ハ此大神の御父子共^ト其御時^ト宮居を定めさせ
給へる^ハ死伊國^ト事^ハ云^ハふ^ハ更^ハあ^リども此^ハ時^ハ筑紫^ト

風土記 野間郡
熊野山所名熊野
申者昔時熊野止
云船設此至今石
成在因誤此野本
也 有伊の地名
申緒と云ひ且天
石船の事 思言
可い又風土記上
右湯谷上有大樹
曰標木三巨木其樹
高聳若浴其枝葉
如天之雲云云有
此と万葉三山都宿禰人至河津極泉作歌云三湯之上有樹村守見者臣亦生冠尔家臣と見えれば此
此其の上行の在一事あり又臣亦大身木と云事ありて其事有大神より出たり

り御在り坐て此大八洲国を右よりや巡坐けむ左よりや経給へりけむ傳無れば今知べりざら事云も更なり然れども物も見えたり事跡を以て云むも包まき心ちの為れば今ハ右より巡りて給へり御事見奉りて記し仕奉りてむ神名式に伊豫國新居郡伊曾乃神社名神大伊豫郡伊曾能神社二所御在り坐す伊曾ハ伊佐宇の切れりて全く此五十猛神と聞ゆかり此に就て誰も知れずむ事ふかり此國に名高き扶桑木の有けむる思合せしむ非トク僧明月が著せし扶桑樹傳と云物有る其に我郷有扶桑樹

而地僻人質世に未傳之豈不遺憾乎客歲余南遊登海上諸山以槩見扶桑之舊跡其山海之間巨巖知石盡有美質色則玄黃紫赭青白純雜無軌余熟視之愈是水之化石者也故縱橫木理備存焉其焦而埋者今在伊豫喜多二郡山海敬十里其海潮之中往有為磯者其上潮勢極惡判然不可由焉海船之所畏憚也其最近者暮春之初海潮大落則揭厲就之用獨頭斧剗判取之余亦得之而還其質如炭堅實純粹研之則黑於漆光益澤流焉得物珍重古稱扶桑樹余實觀之匪聞斯傳之也云云此大樹の石と化て喜多二郡に在る伊曾乃神社の

御事ニ由有て聞ゆ然るを日向風土記ニ卷向日代宮
御宇大足彦天皇之世幸兒湯之郡遊於丹裳之小野謂
左右曰此國地形直向扶桑宜号日向也ト有る此ハ其
景行天皇十七年御紀ニ幸子湯縣遊于丹裳小野時東
望之謂左右曰是國也直向於日出方故号其國曰日向
也ト有る同ト事ヲ直向於日出方ト有る依て日向
ト云ハ聞えたるを右ニ直向扶桑ト云を以て日向ト
云ニ事甚謂ハ無を以て榮ふニ當昔猶伊豫國の扶桑
樹有つが天を覆いて立榮えのたり一程ヲて天日の御
影シ此樹抄より白ひ出させ給へるハ然る物ヲて其

扶桑ト云るふハ即謂ゆる檜ナリけむ事打合て同
ト言ふる故ニ日向の國名トハ成りルまて向於日出
方ト云も向扶桑ト云も各の一傳ナリありけり猶
神名式ニ越智郡大須伎神社樟本神社ハ木名を以
稱奉るも由有げあり事共あり平田の扶桑國考ニ右
埋木を扶桑木ト決りたるハ信ルれ説あり國人ハ
扶桑木ト云も有る趣ありト多くハ桂ト云傳ふるも
不レ已も其木を得て藏たるト其質ハ石炭の如くトて
堅實ありト漆ヲよりト黒く木理ハ詳ありトねど實ト桂
木トヤト思ハ質の無クハ非ズなりト思ハ質の然ルも堅黒
ありぬ所ハ擗ハ非ズなりト思ハ質の然ルも堅黒
て良ク為れハ扶桑を擗ありト云ふ方入ル為事ハ
れト彼日向ト扶桑ト記を讀得るト疑を遺す可キ事ハ
非トレ且扶桑ト山名の富士トをハ疑を遺す可キ事ハ
説共ハ有るト非ぬ強説ふルハ今云ニ限リ子

非ず 諸筑紫より 伊豫を経て其落著せ御在り坐り地
ハ即紀伊國あり可きハ下ニ即紀伊國所坐大神是也
と結み次の一書ニ凡此三神亦能分布木種即奉渡於
紀伊國也と有る是即神名式ニ紀伊國名草郡伊太
祁曾神社名神大月次 大屋都比賣神社名神大月次 都麻
都比賣神社名神大月次 と有る是あり此御社の御事下
大丁二十八百廿ニ注一奉る可し又同式ニ同郡伊達
神社名神大月次 或書ニ祭神一座五十猛命と云々實ニ然る
説あり同郡志磨神社名神大月次 御在り坐を此ハ謂ゆる三
女神ニ渡らせ給へるニ神階の御事あり何時ニ等

しく諸共ニ預り給ふふど然有ぬ可き神等の御由縁
小あし渡らせ給へりけり仁明天皇御死ニ承和十一
年十一月巳酉朔辛亥奉授紀伊國從五位下志磨神伊
達神靜火神並正五位下文徳天皇實録ニ嘉祥三年十
月乙巳朔乙丑紀伊國伊達神志磨神鎮火神並加從四
位下清和天皇實録小貞觀元年正月二十七日甲申奉
授紀伊國從四位下伊達神志磨神靜火神並正四位上
と有て諸國ニ在ゆる伊達神社にてハ此子勝らせ給
へる事無りけり右の靜火神社の事ハ此子然しも
並ませ給へる依て有るやう有あむとて今ハ本の任
り引つ此御社今ハ若山の野所と云ふ立せ御在り

神名式
 和名引之相楽即
 和名引之天乃天支
 貴神社新嘗
 此御神と云
 さき又死伊

坐、和名坂郡名山城國紀伊岐と有り郷名も紀
 伊郡紀伊と有ハ此五十猛神の御事小や因ハリけむ
 神名式小同郡稻荷神社三座並名神大此御社の御事
 八傳十三十六十九子注せるガ如ク中社ハ素戔
 鳴大神の御子宇迦之御魂神ト渡ラセ給ヒ上社ハ御
 父素戔鳴尊下社ハ御母神大市姫命ト云ヒ渡ラセ給
 へハ然ナせる事ト無キを其社記ト神祇拾遺云龜山院
 弘長六年加田中四大神爲五座也田中神者三峰地主
 乎一説云大四大神者四柱兒神也五十猛大屋姫梳津
 姫事八十神也と云るを田中社ハ神名式ト謂ゆる飛

鳥田神社一名柿四大神ハ御諸神社の御事ありと云
 り若て同書ト舊傳云當社素戔鳴尊鎮座其一也然則
 福此神愛体勿論歟と有て古より稻荷山の神木ト
 て持齋くものろ福をしも素戔鳴大神の御事ト係て申
 せらも此第五ノ書ト乃坂鬚鬚散之即成枚トも合リ
 歌トハ千載集ト稻荷山標シの枚の年舊りて三の御社
 神佐備小けり夫木集ト二月也今日初年の印トて稻
 荷の枚ハ本ト葉ト無ト又稻荷山杉の青葉を挿トつ
 ン取ラハ著キ今日の諸人ト有て其古キ事知ラレタ
 リ備四大神の御事ト神祇拾遺ト出タラも右ト同説

して松尾七座の中より四大神と申す御在り坐り共
 五十猛神以下の御神と渡り給へば御父大神
 の御由縁と申し紀伊と云ふ郡名郷名と就ても神代
 の御事跡あり可き事申すも更ありける
但稻荷五社の事ハ右に引る社記の趣にてハ龜山院天皇弘長三年より四月の事ハ右に引る社記の趣にてハ龜山院天皇弘長三年より四月の事
 二十六日宿禰稻荷と有る下の自注に田中四大神
 兩社幣加奉之中社下社同以參詣田中幣於下社奉幣
 之時取加奉之大神之幣於中社奉幣之時取加歸洛用飯
 坂の旨有る此本文に上社に詣給へる共中社下社
 へ其後由りて管音巳に五社の氣をいふるを見奉り可
 稻荷五社大明神と見え神祇伯忠富王記の永正二年
 三月七日稻荷祭の如く此地に就てハ甚止事然り此
 四大神ハ右の如く此地に就てハ甚止事然り此

此近傍にて大和國
 葛上郡長津國郡
 勢郡近江國伊香
 郡多太神社坐り
 出雲國上記子詣
 りて衛珠寺守而
 由比古命と云
 五十猛神の御事
 あり申すに云明
 りを以知べし

給へりけり又神名式に伊豆國賀茂郡伊太兵和氣
 命神社坐り此五十猛神を伊達神とも韓國伊太兵神
 とも申奉り御名御在り坐り上り例の和氣の言を添
 て稱奉れりあり文徳天皇實錄に嘉祥三年六月
 朔庚戌伊豆國伊太豆和氣命等並授從五位下仁壽二
 年十二月 朔丙子加駿河國伊太豆和氣命神加從
 五位上齋衡元年六月甲寅朔己卯加伊豆國從五位下
 伊太豆和氣命神授從五位上と有る此二度共り同階
 あり事疑ハ右の仁壽の度よりハ初國名取とも違
 へば草案などの混入たりして其一ハ衍れり者不

可一又伊太氏和氣命を伊太豆和氣命と為すハ氏
と豆と音の通へりて奇珍なり事あり然も通ハ
一申習へるなり又式子同郡杉旛別命神社坐り伊
豆志と云物ナ云く當郡田中村子来宮キノミヤ有り五十猛
命を祀る杉旛別命子て川津十七村の惣鎮守なり慶
長の棟札子木野大明神と有り祠傍の古樟樹十三抱
許又膽ハの大樹二株有り末社子小鳥と云有り又當
郡佐二原比咩神社の坐す篠原村子蔭山明神有り慶
長の札子當所鎮守木宮大明神部類眷属百廿社内也
と有り又同郡ハ幡村子木宮明神有り大見十六村の

惣鎮守あり相傳て式々杉旛別命ありと云り採有
り上十一ふも注せり如く那賀郡走湯子も来宮明神
と申して熱海郷の惣鎮守子て渡りせ給ふと彼國
子てハ所狭トコロセき神子御在り坐ふるハ神代子りの御事
ありも著く同郡志理太平眞神社坐るを同書小賀茂
郡白田シラタ村子坐す素戔鳴尊を祀り後ハ幡を配す眞和
三年の棟札子白田眞濱神社(有)新羅擁護神也と
有り野州岩船山と同神あり略と有り此神名ハ志理
太ハ上十七子巳子説モリク後方子て皇太御國の裔完子
在る國の謂あり平眞ハ招めて彼韓招子等しく彼國

ハ更々云ず遠き國々をも八十廻打掛て引寄らる
如くして皇御孫尊の大朝廷に令仕奉給ふ由あり次
の一書に素戔嗚尊曰韓郷之島是有金銀若使吾兒所
御之國不有浮宝者未是佳也と詔給ひて事議らせ給
へら此御言を以て想像り奉り知べくあし有けり然れば
此二大神の大八洲國を巡りて木共を殖度し御在し
坐す時東國に物為給へる間の御座は此國にてこそ
有けり右の杉神左備郡留鹿香山之鉾摺之本爾藤
生左右二と有る鉾摺摺同トく摺本の未尖りて牙の
如く嚴の一と有る立るを云あり或人出雲風土託子謂由
る衝摺寺平而出比古命同神ウと云り此神の御事ハ
傳二十六卷二百六十八丁に説奉れらる其或説実ハ

謂れらる可し其ハ衝摺ハ都伎富許ふれども次を須
伎若然と時ハ神名式子謂ゆ和泉國大鳥郡大鳥神社
歎歎と有る是あり備此國古甚トき大樹の有けり
も若くハ然る由縁あり高安山と有る樹其樹之影當旦日者速
此之御世免寸河之西一高樹其樹之影當旦日者速
此道鳥當夕日者越高安山と有る樹其樹之影當旦日者速
氏の苞苴巧語子免寸ハ登能政と訓ハ是あり和名抄郷名
ハ大鳥郡常交今為深井不加井と有る是あり神別天神式
ハ等乃伎神社歎歎と見え姓氏和泉國神別天神式
ハ殿東連と云有る此より出た姓氏和泉國神別天神式
ハ千貫橋と云地名今遺れり年久一く經たる木
ハ名香の薫り有る物不ル然る事の故ハ右
ハ橋名とハ成たりけり然る事の故ハ右
ハ其大鳥神社の由縁も著しき御蔭と伎葉の處へり
ハ殿木と云事ハて大鳥の御蔭と伎葉の處へり
ハ珍ト一けれハ今云のハ神名式ハ常陸國那賀郡青

船子天鳥船ふと
云々同トキを大鳥
と云ハ本ハ別ナリ
て一ト合ラセ

今東山道の國ハ六神
 名式近江國蒲生郡
 大屋神社今野の南
 千里許十神寺在
 云々此神上野村
 仁記此神上野村
 杉山明神と申有り
 大山神命古此山
 其本末を改て祭け
 あり上古に官材を
 本郷より遷移せり
 云々有し近き傍
 伊香郡多太神社
 主神社相並び又今
 昔加語を見たり

山神社坐を二十八社鎮座と云物子今属茨城郡在青
 山村祭神五十猛命一名大屋彦命素戔嗚尊子也と有
 ハ此ト始自筑紫凡大八洲國之内莫不播殖而成青山
 焉所以稱五十猛命為有功之神と有子取て後人の推
 當たり者ありむりとも思ゆれども傳二十三
 注るが如く當國ハ素戔嗚尊奇稻田姫命ハ更あり
 御子神等の社ニ数多御在坐セバ強たりとい定
 む可うずあむ有けり和名汝郷名鹿島郡大屋
 云有之紀伊國名草郡大屋郷の有之思合せらる事
 命例祭四月八日見たり又
 ありりー又神名式陸奥國色麻郡伊達神社大
 見

大郡ト大あつ作本生たりけり其國五言守り然ルハ其木の言を指たを想像可し其影朝ハ丹波國に差一タハ伊紀國
 今東山道の國ハ六神名式近江國蒲生郡大屋神社今野の南千里許十神寺在云々此神上野村仁記此神上野村杉山明神と申有り大山神命古此山其本末を改て祭けあり上古に官材を本郷より遷移せり云々有し近き傍伊香郡多太神社主神社相並び又今昔加語を見たり

中和名汝郡名色麻を志加萬と有を播磨國の郡名
 饒磨^{ニカマ}其訓一あり郷名も饒磨郡迎達^{伊多}と有も
 右の伊達ト同トきと神名式も饒磨郡射楯兵主神社
 揖保郡中臣印達神社^{大神}ふと御在坐共田縁
 有ら御事あり可し又右の色麻郡と並びて玉造郡温
 泉神社御在坐り出雲國意宇郡玉作湯神社同社
 生韓國伊太氏神社相並ハセ給へるも此御事ト亦着
 無らトヤハ備和名汝郡名信夫の下志不國分為
 伊達郡ト有^{あが}其信夫郡^の郷名を載^りる
 國造本紀ト謂ゆ信夫國あり故ト依郡ト收^ひ

任子改ざりしや然れども神名式ハ信夫郡五座
 して出で神社の名を載るれ今も信夫伊達と云て共
 一國とも云つ可き程の大郡にて色麻郡ふど云ハ已
 亡て觀跡聞光志ハ按色麻郡不詳其地加美郡有
 竈者是古之色麻地而略ト云らガ如く成れり
 又和名抄郷名ヲ安達郡伊達ト云有も次めて此神子
 就ハ神跡ふりり
 又其安達を下ハ安多知と注セ
 其安達伊達其言の相近き
 ハ若くハ安達ハ大伊達トて其對へたる名ヤ然
 ルとも万葉七卷三十二下ハ陸奥之吾曰多良真弓十
 四卷十五下陸奥歌ハ安太多良末由美ト有を神樂歌子
 六下ハ義知乃久能安太多良末由美ト有を神樂歌子
 安太知ヤ換ルハ元ハ安太多良末由美ト有を神樂歌子
 然ルども達を多良ト云べけんハ別の事ハ非

武王扶國遠敷
 郡實國能多郡
 多太神社坐其
 中六下神云べ

合自郡神社又天
 利劍神社坐此
 命と申す御名子
 通へるを思ふ可

りこの又△和名抄郷名ヲ越前國今立郡大屋有り此ヲ就
 獨傳廿九卷九下ト云事共有り考存可
 て其由縁を索るハ神名式ハ同郡敷山神社坐り但其
 ハ四神出生章第ハ一書ヲ謂ハハ籬山祇神籬此云之伎
 とも思ゆれども此をヒキヤマ籬山と見時ハ其青山成セ
 御事ト通ふを上トト注シも注シ敦賀郡白城神社信露
 貴彦神社共御父素戔嗚大神ト思ヒキ就テ敷山
 神社ハ五十猛神トて坐トると云ふリ加賀國江沼
 郡御木神社有リ又能登國鳳至郡鳳至此古神社同抄
 郡名ト鳳至不布ト注セルども式ハ郡名神名共ト
 布宜志ト訓ス其ト從子可ハ彼國名勝志ト天冬衣神

にて大汝命同体あり大神の退治給ひし鷲の骸を氷
にたらしめり就鷲藏宮と云しを字書に重藏宮と云と云
りし有り其大汝命と同体ありと云い非ぬ事あり
も此神社を天冬衣神と傳ふ事決りて古傳あり備
此鳳至此古神と申奉る御名ハ殖木知彦神と申す義
にて彼樹種を大八洲國に播殖して青山と成させ給
へる御功を以て稱奉る御名にて上三四下三巳下注
せり如く古事記の天之冬衣神ハ天之殖木主神の
義あり此ハ天之菅根神と有ハ天之殖木根神と申す
義ありにて冬衣ハ菅根ハ鳳至も其意終りて歸り

りりし備此鳳至の字を當るにたりし意有る可し名
勝志ハ能登國ハ往古羽咋の馮より能登郡海道を經
て内浦田鶴濱石崎ふど云所海濱きよて島國ありし
時ハ人も住ず有し依て怪鳥大蛇の栖處ふて有し
を氣多大神此を退治有しより人家出来て一國と成
りし由山田の龍大明神鷲宮ハ幡宮の社傳に遺るし
と云ふ此氣多大神ハ本殿ハ大穴持命與社ハ素戔鳴
尊稻田姫命ハ渡りて給へるが此時末大穴持命の生
坐の以前の事より有けれハ素戔鳴大神の五十猛神
の其怪鳥大蛇を退治させ給ひて樹種を殖させ給ひ

六更より次云々
佐渡國ニ渡澤と
申すハ此ノ物
也ト云々
可ク思フ

後十代已貴命の此國を造る給へり事とを一日為
て天冬衣神大汝命同体ありと云傳たりや然れど
も此鳳至此古神社を鷲藏宮と云來れり以て其以前
あり事ハ知るめり又當郡白比古神社坐も右に謂
同トく素戔鳴大神子渡りて給へり又久志伊奈太
伎比咩神社坐も右に謂又久志伊奈太
又羽咋郡羽咋神社坐も右に謂又久志伊奈太
又國之餘有耶見者と有る當國珠洲郡又神名式に佐
渡國羽茂郡度津神社古本書入又一宮記等五十猛
神也と有る實に然る言ふり欽明天皇四年御紀に越
國言於佐渡島北御名部之碕岸有肅慎人乘一船舶而

淹留春夏捕魚充食略於是肅慎人移就額河浦浦神嚴
忌人不取近渴飲其水死者且半骨積於巖地俗呼肅慎
隈也と有る釋に浦神若度津神社歟と云る實に其如
くして浦神嚴忌と云い死者且半と云ふと上五十
注せる筑紫神の御事に似たりも實に五十猛と御名
に負せ御在り坐す如く麿く猛き神に御在り坐す故
ふ其御崇も甚しく渡りて給へり又雜太郎御食
神社飯持神社有る御木神社木持神社の意ありむり
とも所思ゆ此に吾堂大龍光賢云く去り弘化四年
五月の事々々越後國警駈郡の海邊に道遠サむと

其頃宿ルら出羽の國境ある大川と云村より出立て
行むと為らば其邊の海岸に巖峙り磯嶮しく為て
歩よりハ一足も進む可らずあは有ければ海船路
より行子画に書る知ぬ國の山水の圖思をえて峯續
ハ唯一枚の木化石にして（其止は朽木より化れる赤
土の（川）少く有の）あるを所狭く（木共の生立りけり
を浪風も荒る）げや若ても千代に短きけり
思ひ許り（ヤセサ）瘦腰（い）たる老木ありけり四里許有て寒
川と云々著く其見渡りたる向峯に松蔭と云有けり
船人の問ず語を聞き古昔弘法大師来りて板貝と云

ふ邊より松の種を蔭初て此處に至りけり頃其木種
の盡竟まければ蔭初めけり（マツカギ）なり松隈と号けり
後子訛りて松蔭と云云と云々心留りて思へ
くくハ其弘法と云や彼ハ紀伊國の高野山を開きて
住けり法師とて世に奇異しき事と云へば神代の
事と雖も彼が名を以て傳ふつら俗の習ハありけ
れば然僻傳ハ物為けれども其故無ハ非ず此五十
猛神をバ御紀ヨ即紀伊國所坐大神是也と見えたり
ければ神代ヨ大八洲國を巡らせ御在り坐て此邊迄
も樹種を播殖させ御在り坐けり傳の有て紀伊國

高野御神ハコノミカミハ辛
神の亦名ト所思
けん此御神の御事
と法師ト云く傳へ
たし右の光賢の
説笑ト謂ハナリ

皇國の中
佳き漆あり

大神の御所為あり事を且こ知て云来れを後其
大神あり事を忘れて紀伊國の大師と云事思違へ
言誤れる者あり可くして斯る傳説ハ猶諸國にも必
有べかりき事ありけり傳云ハハ注るが如く其高野山を主領するナリと云るハ事違を踏て造あり
云事あり有けり其山中ハ神名式の漆山神社御在
し坐るを主計寮式ハ越後國漆と云有て此近傍ハ
殊々其木の多在る余ども思ふ此ハ不殖韓地盡以
持歸と有ハ皇神等の深く御心を用ひさせ御在
坐けりよて惣て皇大御國の物ハ一も萬國ハ卓れて
美なき中ハ漆の強くて光澤有りと紙の白くて堅實

あるハ神代ハ用うる事無くして後世の大あり利
用と成り我其美を知らずして夷狄より實々之ハ欲
する物ふ此二種ありけり皇神等の遠き世を見徹
し坐る御所置あり仰奉りよも餘心足らず思ゆるあり
但漆山神社を五十猛神ありと指定して今云ハ非
ルども世人此皇大御國の美を云とてハ稻穀の味
事ふとをのこ常ハ云事あれども漆と紙との天下万
國ハ勝りて美ハきを云ず近頃外國より頼ハ乞望む
ハ依て漸くハ我ハ卓絶たる事を知あり遅き心あり
けり然るを世ハ猶許多の癖者有て我ハ漆を紙と
外夷の乞ハ随いて渡ハ彼より其代ハ易ハ性脆き漆
器を玩び用ハも立ざる紙を悦ぶふし實ハ漆の悪む
可き事ハ神名式ハ丹波國桑田郡伊達神社今龜山子
り北西の方ハ宇津根村と云有て其地ハ御在し坐る

云り此地名上六十引る式大隅國贈於郡韓國宇
豆峯神社坐る其名と似通ひたれが決めて故有べき
事あり可し和名抄郷名但馬國養父郡大屋有り式
夜伎同郡村坐山神社此ハ郷名ハ養耆也と有て別
多れども今地理を見らハ大屋郷と相接けれが若く
ハ夜伎ハ屋木の義ハて此も一の神迹あり可くや又
七美郡多佗神社小代神社二座伊曾布神社見えたる
も傳二十六二百七十十一丁注ケ如く出雲風土記ハ秋鹿
郡多太郷中略須佐能乎命御子衝旃等子而苗比古命國
巡行坐時略靜坐故云多太と有て其未官知の中ハ多

太社同多太社有り諸此神ハ伊豆國賀茂郡杉旃別命
神社同神ふり可き由上六十九丁ハ注せれハ右の多太神
社小代神社ハ共小此神ハ坐し伊曾布神社ハ有功之
神の訛れらふて共五十猛神ふらむ渡らせ給ふ可り
けり又同式ハ因幡國邑美郡中臣崇健神社カクケ有る此ハ
下八丁ハ注云ふ播磨國賀茂郡崇健神社と同トく共ハ
同五十猛神ハ御在し坐すハ因幡志と云物ハ今三戸
古保久末村ハ在り罔森天王と稱す土人云此神形甚
太し神託ハ云く我形休林ハ梢ハ等し尋常の小祠ハ居
る事を得ず社字を作ら可うハず云と有る神託ハ

此崇健神を五十
 猛命と為て見
 神名式に隱岐國
 地即天健金草神
 社此神多可
 扶桑記に延喜六
 年七月十三日
 國言從坤方極
 高次天健金草
 社宣新羅國神
 社淳居此海我
 退彼城令吹大
 者如帆柱木等
 是是是羅羅賊
 机柱木者神明
 苦其微如此有
 多此新羅國神
 を給へる全此
 十猛命を可し
 健ハ五十猛命
 金草の事未得思
 ナレ雖木種も殖給へる御事似着て聞ゆり

ハ此岡森の林梢を以て神体と為て御在り坐す事を
 詔へり言をたたり者其を木を殖給へる神坐せはあり可
 備此中臣と冠くせ奉れりハ播磨國揖保郡中臣印
 連神社名神大と有る其中臣ハ郷名ありて謂ゆ
 中臣神中臣氏ふど又神名式ハ出雲國意年郡玉作湯神社同
 の中臣ハ非ず又神名式ハ意年郡玉作湯神社同
 社坐韓國伊太比神社揖夜神社同社坐韓國伊太比神
 社佐久多神社同社坐韓國伊太比神社出雲國阿須伎
 神社同社神韓國伊太比神社出雲國神社同社韓國伊太
 比神社曾只能夜神社同社韓國伊太比神社と有て何
 れも押立て一柱にて御在り坐す右の六社坐す共
 相殿從祀にて御在り坐す状あり必由有べき事あり

和名抄郷名に當郡都麻と有り 紀伊國名草郡都麻神座思合す可
 紀伊國名草郡都麻神座思合す可

然るハ此大神ハ一も素戔嗚大神の御為ハ長子
 御在り坐て其初高天原より天降り御在り坐けり時
 御伴神と為て從奉らせ給ひ諸の樹種を播殖させ御
 在り坐て大八洲國を悉く青山と成させ給ひて有
 功之神と稱奉る許の大なる御徳あり御在り坐けり
 ハ然る物にて韓國伊太比神とも申せば外國をも造
 立させ給へる御功あり渡らせ給へれども天下經營
 の御事成就てハ御父大神より直ハ大國主神へ授
 け受させ給へる御次序ありハ此五十猛神の御功ハ
 其上を輔相給へる御事當りて表立てハ大國主神の

御業（五ノ）御事（五ノ）あり（五十猛神一神の御社ハ格別ナリ）右の六所（カキハ）必共ニ相並
ませ給ふと雖も正祀ハ立せ御在（カキハ）坐（カキハ）御事ト
あむ伺奉りたりけり猶當國ハ此大神の御社ハ
て別御名ありも多在り傳二十六二百六十ノ注ヲ風土
記（鳥根郡）山口郷郡家正南四里二百九十八步須佐能鳥命
御子都苗支日子命詔吾敷坐山口處在詔而故山口負
給と有ハ彼神劍を奉上（カキハ）天子參上（カキハ）給へり御功
ニ就て負坐る御名（カキハ）神名式（カキハ）謂（カキハ）中（カキハ）當郡布自伎
美神社多氣神社是（カキハ）あり又其二百六十ノ注ヲ同記秋鹿
郡多太郷郡家西北五里一百二十步須佐能（命）御子衝

又上ノ注ニ同
記ニ郡家正南三十
六里須佐能鳥命
坐云々又自伎
神名未詳ト有
此其麻羅ト有
然肥前国井島
山ノ著セ給へり時
の御名（カキハ）同ト神
御事申（カキハ）更（カキハ）不

杵等乎而苗比古命國巡行坐時至坐此處而詔吾御心
照明正真成吾者此處將（靜）坐詔而靜坐故云多太と有
此も五十猛神（カキハ）御在（カキハ）坐（カキハ）めり其末官知社の中（カキハ）多
太社同多太社と有（カキハ）是（カキハ）あり（カキハ）備此一書の始（カキハ）新羅國
より此國（カキハ）御在（カキハ）坐（カキハ）著セ給へり趣（カキハ）あり（カキハ）僻事（カキハ）ト
思（カキハ）一（カキハ）けれども後の御天降の時（カキハ）ハ御父大神（の御伴）
歎川上（カキハ）天降り御在（カキハ）坐（カキハ）て御父子共（カキハ）此國（カキハ）御在
一坐ける事傳二十三卷より以下條ニ論め云々如
くありけれバ餘國（カキハ）ハ勝りて此御社（カキハ）多（カキハ）りけ
り同記（カキハ）鳥上山（トリカミヤマ）の所在ハ仁多郡（カキハ）あり（カキハ）今船通山（カキハ）

△播磨風土記
饒磨郡伊和里
餘小大汝命之
子心行是強是
以又神患之乃
到因達神山遺
其子汲水云と
有る因達神山
次く此地あり
又同達里は若
林因達息長帯
比賣命欲平韓
國渡坐之時御
船之前伊太神
在是此處故因
神名以為里名と
有る是迎達御
名の起る所以と
鎮座ハ神代あり
の事ありハ大己貴
神古小己小因達
神山の名有るを以知

名神と有る郡名郷名共々相等しき事故有心一皆同
大國假字風土記と云物子射楯兵主神社古ハ饒西郡矢
落村と云子有るを今ハ辻中村小移す大己貴命五十
猛命二座ありと云るハ然る事にて實子射楯神ハ五
十猛神子御在り坐一兵主神ハ大己貴神子渡りせ給
へり又同郡白國神社陽成天皇實錄子元慶二年六月
十七日辛巳授播磨國從五位下白國神正五位下と有
る是即今廣峰山の東の山足に今も白國村と云地子御
在り坐す神あり可きが白國ハ若くハ新羅國の略と
聞傳二十三其廣峰山の神をこ牛頭天王と申習ひてせし素

茂鳴尊と申奉り山城國祇園神社の本社たる由ふる
ハ二十二社注式子始て北白河子移奉る事所見たり
然ルハ其白國神社ハ右の廣峰ありて都の白河と
云し其神の御在り坐ける事子就て出来れる名あり
よや有るひ何れにして右の射楯兵主神社ハ大
己因有る御事子なむ有けり又式子揖保郡中臣印達神
社名神和名抄子同郡中臣郷有ルハ其地子御在り坐
す例の印達神ありけり或説子今龍野と云る地名有
る是あり可いと云り如何も其地子就て御社の所
在を求む可き事ありけり又賀茂郡崇健神社上七十
六丁

此本之事傳三卷六
 十四丁三注可
 此本之事傳三卷六
 十四丁三注可
 此本之事傳三卷六
 十四丁三注可

子引る因幡國邑美郡中臣崇健神社と合せて思ふ
 中臣ハ右子云る郷名ありて崇健を多加多祁と訓
 むハ高猛タカタケと云事にて全く五十猛神の謂と聞ゆれば
 右の揖保郡は渡りせ給へるあり此本社ありて決
 く五十猛神の亦名とこりハ所見たりけれ播磨風土記云難波
 高津宮天皇之御世楠生於井尺朝日蔭淡路島夕日蔭
 大倭島根乃伐其楠造舟云云と云事有り又今も三木
 と云地名の有ふと此國に上世ハ甚大なる木共
 の多在りけむと所思えたり決めて神世の遺木あり
 可き事云右の如く大八洲國内子存ゆる神社を也攀
 げ地名を標して云中ハ神代よりの事のミよてハ
 有るト云く夥多に有る可き事ありハ有れば大凡

ハ此大神の國巡り御在り坐けむ御道次を以て唯如
 此もや御在り坐けむと當昔の御消息を想像り奉ら
 可き種ハいよとして然るむ注し奉らるを僅小書典に
 見當れりたよ如此こり有けれ猶遍く尋奉らむハ
 社傳の舊記古老の口傳に遺るる故事あり多在りぬ
 可き御事ありり一儲此皇大御國ハも皇神の愛く
 して國と羨たく願ハしく作固めさせ御在り坐む御
 心御在り坐が故に此素戔嗚大神五十猛神共天上
 より天降り御在り坐たる後子韓地ハ流離りりれ
 御在り坐あらも猶此大御國を青垣山と美瑞

文選東廣微補之
 詩無高不播
 無下不植と有
 とも考ふ可し通證
 といつ断す播種百穀
 と見ゆ
 三七行青山景茂山
 道十一三十三青山之
 石垣四間九十三行
 青山平振放見者皆
 花香未通玄梅花盛
 未通玄三十三青山平
 飛酒見者云ふ

あり殖ハ其苗をあり概てハ唯字ことの云事ふれ
 ども判ち云時ハ右の如き差別有る事ふむ有け
 右引る拾遺あつても然り麻ハ種子ありハ播あり穀
 ハ苗ふれハ殖あり猶傳二十八卷十丁考合す可
 一因ふ云ふ此文地神本紀ハハ
 倒又して殖播の字ハ作れりハ
 牙神の御歌ハ阿遠夜麻迹鳥延波那伎佐怒都登理岐
 藝斯波登興年沼河北賣の歌ハ阿遠夜麻迹鳥比賀迦久
 良婆鳥奴婆多麻能用波伊傳那年ふど見え万葉三
 子青山之嶺乃白雲四四十丁十子青山乎横教雲之六十八
 子青山乃曾許十方不見白雲毛千重尔成来沼もも有
 て木の繁りたり山を云ふり又七十九子三芳野之青根

我岑之薙席誰將織經緯無二と有る地名ハ非ずて
 木の繁合たり峰を云ふり十四二十丁十子安字祢呂尔多
 奈婢久君母能伊佐欲比尔又安乎祢呂尔伊佐欲布久
 母能余曾里都麻波母と有る安字祢呂の呂ハ助辞子
 て青峰ハ青山と云子同卜きを以て境可し又山名
 子青某と冠くヤ云例ハ一二十丁十藤原宮御井歌子日本
 乃青香具山者日經乃大御門尔春山跡之美佐備立有
 畝火乃此美豆山者日緯能大御門尔弥豆山跡山佐備
 伊座耳為之青菅山者背友乃大御門尔宜名倍神佐備
 立有と有る青香具山の青是ふり此子對へて耳梨を

青菅山と云るハ青青山の義にて木立の繁茂ヲ山色
 ハ青く清々しき物あり謂ふり其中間ニ畝火を美豆
 山と云ハ右の二の青子並べて瑞々しく美しき也
 云々思合す可し冠解考子美豆こふ語ハ先ハ草木の
若く美しく栄ゆを云より万の
 物を讀称へて美豆云々といハ云けり一萬葉十三卷ニ
 槻の木子水枝指と詠こせよ若木を美豆木若枝を
 美豆枝若く健よりあふ人を美豆こしふと云を思
 へとい云れたるをも此ニ引合せ思ふ可き者あり
 ○莫不播殖而成青山焉の莫不ハ上ニ不殖韓地盡以
 持帰の盡字より應きて大ニ力有る所あり此事次ニ
 云べし備纂疏ニ進雄尊之暴行使青山變枯於是得音
 山也と注させ給へりハ事足はずと雖も實ニ然る可

〇〇〇御説と感奉る事御事ありり其ハ傳十四
 二百十九百九二十三三四丁ニ注るが如く嘉茂鳴大
 神彼神迹の以前ハ種ニの御罪御在り坐けり此
 度の御天降より以後ハ惣ての御所業悉くハ天下
 蒼生ニ御恩頼を令蒙給ふ御事のこしして自然ニ先
 の御過失を補はせ給ふ御事ニ當りて此ニ樹種所々共ニを播
 殖させ給へりあむ其中の一として有が中にも甚し
 き御大業ハ渡りて御在り坐けり然るハ四神出生章
 此御神の御事を復使青山變枯又見第一一書ニ
 青山為枯ふと見え古事記にも青山如枯山泣枯河海

者悉立乾と有る此大神の御暴行の始とも申す可き
 此事あり故に彼神逐はれて此天降り御在り坐
 一著て先此御政をふじ最初ハ物為ませ給ひけ
 一又其御子五十猛神と申すも一速く雄健く御在
 一坐す神と聞ゆると有功之神とも稱奉る許ありを
 以ても共以前共和やると御在り坐て以前ハ打替り
 たり御有状をふじ見奉り知べきふる備此ハ韓地ハ
 殖ずして盡し持歸らせ御在り坐けらハ其青山を拓
 山と成り給へり一程ハ唯大ハ洲國有のこして韓
 地より始て外國ニハ悉くハ漸鹽沫の凝以て成れる頃

此大神の御天降の
 程ハ已に彼地形
 ハ且ハ備はりけ
 り其始の事
 を所思して先大
 ハ洲國を青山と
 成させ給ふ可し御
 心とふし振返させ
 御在り坐けり

ろいあり一ハ争てらハ其泣乾枯す可き山の有む
 此を以て韓地ハ渡り御在り坐りども其天の樹種
 をバ此大ハ洲國ハ持歸らせ御在り坐て國內悉ハ青
 山と成り給ひて天神御子の所知看む玉牆内國ハ青
 垣山周りして美なく麗り一固置せさせ給へる事
 傳二十六三百二十一丁ハ掃御氣野命と申奉るハ就て青垣
 山の事を注せらる就て見ら可し神武天皇御紀の大
 御詔ハ東有美地青山四周ハ有が如く凡て國土ハ
 美地と云ハ青山の四方ハ周れら地の事ありけれハ
 此ハ莫不播殖而成音山焉と有ハ又此大ハ洲國を美地

と為させ給へる御事、聞ゆるは、や若て此大八洲國
を盡し青山と成し美地と成し給へる上ハ、又其韓國
より始て萬國より行足ハ、坐て各其方域に隨ひて
其土に相應へる樹種を播殖させ御在し坐けむ御事
此大神を建邦之神と称へ五十猛神を韓國伊太氏神
と申奉るを以て天下に遍く流布すと給へる御事を
想像り奉る可くふし、其韓地と云らハ、上五十一丁に
起りて後ハ、万国を想て加羅國と云事常ふり此
素戔嗚大神豈韓地をのこ造立させ給ふ神は御在し
坐むや又五十猛神唯韓地を建給へる御功ハ、限奉る
御事の御在し坐むや又同ト万国の中ハ、此大八洲國
を先ハ為させ給へるハ、皇御孫尊の大御食國ふり
以ふり此後より外國に御靈威を及べし給ふ可き事

誰ハハ此と ○所以ハ海宮遊行章第三、一書ハ所以兒
思ハガハ此と 名稱彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、有を始として紀中
皆許能由惠尔と訓り此之故の義あり、但由惠を由閉
と有ハ誤あり、雄略天皇十三年御紀歌、耶麼能誕能。
故思麼古喻衛尔万葉十一丁、大舟之由多尔将有入
兒由惠尔十四丁、由惠波奈家栞因母兒良尔其里
兵曾又二十丁、祢奈敞古由惠尔波伴尔許呂波要又三十丁
於登大可思母奈宿莫蔽兒由惠尔十五丁、秋風乃布
可武曾能都奇安波牟能由惠尔又三十丁、和礼由惠尔於
毛比和夫良牟又三十丁、和我由惠尔波太奈於毛比曾不

然らず次ハ一書ニテ
時素戔嗚尊ニテ
曰五十猛命云々有
其文ニ夫須臾八十
木種皆能播生有
い素戔嗚尊ノ御
事多ク次ニ此三
神亦能分木種
ト有テ比自能ト亦
能トノ是を別ル
ル其命を奉リ
行ハテ後ニ義を令知
給ヘラ者多事傳世
八百七十九事ト此之
を別テ注シ知

所見たり 又出雲風土記ニ所以號出雲者又所以號
格有ハ所以ハ由惠あり然るを漢文訓ニ音便ニ由
惠年ト云々ハ猶宜一きを近頃ハ所以號云々ト訓テ
以云云ニ爲流所ト云ハ僻儒ノ
定メヨシテ古語ノ例ニ違ヘリ ○稱五十猛命トハ
五十猛神ト有テ此ニ命ト有ハ次ニ有功之神ト有
神字重複ルル故ニ換ルル所ノト有ケル別
意有ハ非ケル諸此稱字ニ記傳ニ引ルルハ多
閑氏ト訓ルル實ニ然ル事アリ 此例天孫降臨章第
六、一書ニ乃用真床覆衾褰皇孫天津彦根火瓊ニ并根
尊排披天八重雲以奉降故稱此神曰天國饒百彦火瓊
ニ并尊ト有ル此ハ本ニ麻衣志氏ト訓ルハ當ラズ

又神武天皇元年御紀ニ天皇即帝位於橿原宮 故古
語稱之曰於畝火之橿原也 太立宮柱於底磐之根峻峙
搏風於高天之原而始馭天下之天皇号曰神日本磐余
彦火火出見天皇焉 崇神天皇十二年御紀ニ是以天神
地祇共和享而風雨順時百穀用成家給人足天下太平
矣 故稱謂御肇國天皇也 有テ此稱之又稱謂を本ニ
富米^{麻衣志}伊氏ト訓ルル其ト叶ハズ 古事記ニ故稱^{其御}其御
世謂所知初國之御真木天皇也 有テ此稱字を記傳
ト多ニ閑麻都理氏ト訓ルルニ從ヒテ右等ノ訓を
ト共ニ改ム可キ者アリ 出雲神賀詞ニ乃大穴持命乃

申給久皇御孫命乃靜坐年大倭國申天已命和魂乎八
 咫鏡不取託天倭大物主搦甕玉命登名乎稱天大御和
 乃神奈備尔坐も有て凡て御名を稱奉と云ハ其本
 の御名御在一坐上猶殊更あ御事御在一坐す
 時子當りて其御功用の状を言を盡して稱讚奉うを
 云ふり此事ハ已二傳二十二十百下廣厚稱辭祈啓英
 と有下注せざるを合せ讀て曉る可き者あり然らを此
ハ唯ハ稱字を耶豆祁氏と訓ら然ら事ハ無ハ非
ハ其ハ尋常の時二有け斯一節有時の
ハ殊ハ其御徳を言舉して稱奉れハ如何てり
ハ然云む右引る稱之又稱謂を褒申て訓ら意を
 得て不古語ハ求○有功之神ハ記傳ハ此文を引て伊
む可き事あり

皇孫ハ有功謂
 經管之功注
 上ハ然ら云ハ
 如九大八洲國之
 莫不播種而成青山
 焉有唯樹種
 也播種青山之為
 也給へるのふず
 此國主を美地成
 給へるふれハ自然
 經管の事ハ
 此成化れけレ備

佐乎能神と訓むたり不從ふ可し有功の字ハ顯宗天
 皇三年御紀ハ月神著人謂之曰我祖高皇產靈尊有預
 鑄造天地之功と有る是あり此ハ功字伊佐乎と訓
密仁天皇御紀ハ天皇尊賞野見宿祢之功亦賜鐵地即任主部職有ハ伊佐乎志訓
る景行天皇五十三年御紀ハ故美六鴈臣之功而賜
 膳大伴部と有ハ伊佐美と訓り仁徳天皇十一年御
 紀ハ幹字伊佐美と訓らを其五十三年ハ猛幹を猛久
 伊佐乎志と有を以て其同義ハ出た言ありを知ハ
 一言意ハ伊佐乎志可景行天皇十二年御紀ハ熊襲
 泉帥の事と是兩人熊襲之渠帥者也略其鋒不可當焉
 と有渠帥ハ勇雄の義又天武天皇元年御紀ハ大伴

又上三下注せし神
名伊蘇國新居郡
伊曾の神社名神伊
蘇郡伊曾能神社
此有功之神の
御事と聞ゆらむ
て思へらく

連馬來田弟吹負中略即招一二族及諸豪傑イサヲシと有るイサヲシ豪傑
ハ勇雄人イサヲシ子て此志ハ辞の志久志伎イサヲシと活くとハ異子
て伊佐平と云ハ勇イサヲシミたら壯士イサヲシを云小起りて伊佐平
志伊佐平志伎イサヲシと云ハ略切て伊曾志伊イサヲシ曾志伎イサヲシと云ハ男女
を本と為て袁志賣志と云語の出たると全同ト
事子て有けり此の称五十猛神為有功之神と有る等
一子意の文ハ仲哀天皇八年御紀日天皇即美五十迹
手曰伊蘇志故時人號五十迹手之本土曰伊蘇國今謂
伊觀者記也と見え又敏達天皇元年御紀日船史祖王
辰尔ガ高麗の表疏を讀釋る所子由是天皇與大臣俱

△姓氏錄大和國神
伊蘇志臣の事と

為讚美曰勤乎辰尔懿哉辰尔下略と有る勤字伊蘇志伎
又伊佐イサヲシ遠志伎と二子訓ミ又續紀日天平勝寶二年三
月戊戌駿河國守從五位下橘原造東人等部内於廬原郡
多胡浦濱獲黄金獻之於是東人等賜勤臣姓と有る是
あり又同紀第一詔子故如此之状年聞食悟而歎將仕
奉人者其仕奉礼良状隨品品讚賜上賜治將賜物曾詔
と有る解子歎ハ此字注子志純一也とも忠誠也とも
云ルハ麻末イサヲシと訓べく思ハるれども五十一詔子歎
美明美と有ハ美字ハ然ハ訓難一故伊蘇志久と訓べ
一第七詔子其人乃字年何志事歎事年遂不得忘と有

文雅古天皇十二年
御紀一箇忠於君又
孝德天皇前紀
懐忠之誠
伊佐平志と訓せ
り又伊佐平と訓
せり

と十三詔子伊蘇美字年賀斯忘不給止自と有とを合
せて然訓べき事を知べし五十二詔子累世而仕奉麻
佐部事母年奈加多自氣奈美伊蘇志美思坐と有り伊
蘇志ハ常子ハ勤字を書て古書子少き言ふり伊蘇ハ
伊佐平の切れる子て伊蘇志ハ伊佐平志子同ト注
されたり然れば此有功之神を切めて伊曾乃神とも
甲けむ事何うハ疑ハむ此式子撰津國河邊郡多太神社
ハ衝并等平而苗比古命子即在坐て即此五十猛神
子渡りせ給へる由上六十八下子注せり如し又有
馬郡公智神社歟穀と有る此津社の事風土記子有馬
郡又有監之原山云云又有久年知川因山為名山本名
功地山首難波長樂豊前宮御宇天皇世為車駕幸湯泉
作行宮於湯泉之子時採材木於久年知山其材木美麗

今字音取成た

於是勅云此山有功之山因号功地山俗人謬曰久年
知山と見えたり此文ハ古傳ハ有功之山ハ有功之
神山と云事ふり可く功地ハ久年智ハ木貴子木神
廻智と申す同ト可く功地ハ久年智ハ木貴子木神
を称奉れり南名ありけむ古傳と記者の意と相違
へり者ふり可く若予か此説當れむハ一の神名
を此拾出たり若予か此説當れむハ一の神名
云事子拾出たり若予か此説當れむハ一の神名
せさせ給へり○為字ハ此子てハ麻哀須と訓べし右
ト者と云り
八十称五十猛命の下子引る御紀子称此神曰云云又
故古語称之曰云云又故称謂云云と有る曰字又謂
字と同ト義子用ひられたる所あり○紀伊國ハ宝鏡
開始章第一一書及此第五一書を始と為て何處も然
書されたるを仁徳天皇三十年御紀安閑天皇二年御

九十九水國之弓雄
之燭音天

紀子ハ額の伊を略きて唱の仕紀國と有り姓ふるハ紀中悉
子紀又紀臣と書れたるを孝徳天皇五年御紀子木臣
と作る唯一所のミ有り古事記子ハ何れも木國と有り万
葉子ハ一十八小水路有云名二負勢能山又二十朝
毛吉木人之母亦打山行来跡見良武樹人友師母四十二
三子木國乃妹背乃山尔七十七子木國之狭日鹿乃浦
尔又十八木國之妹背之山二麻蔭吾妹又二十木國之
湯等乃三埜二二十一四十子木國之飽等濱之ふど其餘
小も木某と云事多在るハ皆紀伊國を云ふり記傳十
八二十木國之大屋毘古神の下子木國名義此字の如し

此ハ御又大神の御
髪鬘を振散して
木共を生一五させ
給へり由縁て
起ル名ありけり

大屋毘古神ハ五十猛神と一ふり可し其故ハ書紀子
初五十猛神天降之時多將樹種而下然不殖韓地盡以
持歸遂始自筑紫凡大八洲國之付莫不播殖而成青山
焉所以稱五十猛命為有功之神即紀伊國所坐大神是
也又素戔嗚尊之子號曰五十猛命妹大屋津姫命次机
津姫命凡三神亦能分布木種即奉渡於紀伊國也と有
る右の如く木種を分播給ふ神の坐故も木國とハ号
けり取意と有はる此にて通えたり但傳二十八代子注ろが如く
令天昌命太玉命率年置帆負彦狹知二神之孫以齋斧
齋鉏始採山材構立正殿略故其齋今在紀伊國名草郡

御木鹿香二郷古語正殿採材齋部所居謂之沖水造殿
 齋部所居謂之鹿香是其證也見元九如く初國所
 知者一々大御世採材齋部造殿齋部を此國に置
 せ給へるも實は木國木を殖給へる神の御在生すを以て御事由縁に依り事ありたり
 小紀伊國名草部鷲森と云有り宇治郷の惣名ふり
 土人の口碑云く甚こ上代此地に椰の大樹有
 けるが圍三百尋及べり其高倍事又技葉の滋蔓り
 たり事ハ何評有む想像可一所以天日を障翳
 して朝ハ淡路島を覆ひ夕ハ耶賀伊都吉野の郡
 迄も覆へる百姓の憂大凡此を朝廷に奏して嘆き程子
 耶賀伊都の四郡より此を朝廷に奏して嘆き程子
 即當國の國造宇治彦を勅して令伐給へりと今子
 宇治郷の地を穿つた朽木の如き物を掘出る事有り
 土人彼木の根株の遺る朽木の如き物を掘出る事有り
 一頃ハ常に梢の白鷺の栖る所ハ遠く望めば深雪に埋
 り山の如く見えしりハ其杜の名を然号くと云り

古事記に水國之
 大屋比古神と有
 う如くして紀伊大
 神と申さしむ如
 一故

此宇治彦と云ハ紀國道家譜に依り神皇產靈尊六世
 孫宇遲彦命と有る人にして古事記に輕之媛原宮段に水
 國造之祖宇豆比古と有る是ハ其御世頃に今伐
 谷ひ一あり可し傍此木を以て木國の證に引りハ非
 れども彼國にハ古々然大樹も有りありけり圍三
 百尋と云へハ徑百尋許して彼御木の儼木の長九百
 七十丈とも及ぶ程也大神是也公地神本紀に此次の
 一書の文を載たるふ凡此三神亦能分布八十木種則
 奉渡於紀伊國即此國所祭之神是也と書一又其三神
 の御名を連署して已上三柱並坐死紀伊國則紀伊國造
 齋祠神是也と云るも同ト意あり神名式に紀伊國名
 草郡伊太祁曾神社名神大月次大屋都比賣神社名神
 次新都麻都比賣神社名神大月次此二社の御事ハ傳二

十八百廿子注一奉可一備持統天皇六年御紀子五
月乙丑朔庚寅遣使者奉幣于四所伊勢大倭住吉紀伊
大神告以新宮と有八木種を播殖させ給へる神子御
在一坐せばあり又十二月辛酉朔甲申遣大夫等奉新
羅調於五社伊勢住吉紀伊大倭菟名足と有も其始御
父大神と共子彼國子御在一坐て國を建させ給へり
一由縁を以あり此を以て紀伊大神と申すハ國号の
所以と云ひ此神子御在一坐す御事を明ら奉可
一若て續紀子大寶二年二月戊戌朔己未是日分遷伊
太祈都曾大屋都比賣都麻都比賣三神社と所見たルハ

此程迄一所小御在一坐て御紀小紀伊大神と書され
たる是亦ハ如此く三所小分ハさせ御在一坐ても
共小紀伊大神と亦む渡らせ給へりけ然るを天武
年御紀子天皇大御病御在一坐ハ就て七月己亥朔癸
奉幣於居紀伊國懸神飛鳥四社住吉大神と有り引
合セ其御事と思ふハ非かり其國懸神ハ宝鏡開始章
第一一書ハ是即紀伊國所生日前神也とも所見たル
ガ如く日前又ハ國懸の御名を以て書ハ分たれたる
を此ハ唯小即紀伊國所坐大神是也と有らるハ打
任セて死伊大神と申奉らハ此三神の御柱ハ限れる
称ふる事を明らむ可きあり諸家の説何れも其意を
得ズ和名抄郷名ハ名草園郡伊太祈曾神と有る並び
て須佐神戸と云有り本國神名帳ハ謂ゆり正三位須
佐大神と申すも今口須佐村と云子御在一坐て此伊

大伴曾小隣北り又傳二十二百丁二十三三百三
注し奉るが如く同國在田郡須佐神社名神大月ハ次新嘗
も御父大神の大宮慶小御在一坐すふと必深き由緒
御在一坐す御事ふ可一其社或書の寛永記云一天正
の頃迄ハ毎年九月寅卯日神馬十二騎山東莊伊太井
曾より来りて神事を勤一と云一是等皆父子の大
神の親一給へる縁故一て古の遺制一ハ有
けめと云るハ實一然一言一て紀國神社録一須佐社
正保三年十一月の神威の御事を載たり隣里辻堂
村池尻孫三郎俄然而眼直視手足麻木而編体流汗親

族大驚少焉語曰我是須佐大明神也此般為崇於神官
之婦女曹從命遷宮余甚悅汝輩素疎我如古作走馬場
又當下以九月十四日為祭神也今次正月十四日是非吾
意也九月十四日者我子山東伊駄祁曾祭日而我祭本
是一日者也且神職無官而奉仕一仕一余以神扉之闈闔如
俗氏之閨房又務名利而忽一遇一于我矣早可脱一名一利
羈也伊太祁曾嘗曰何不罰彼乎然余以為此社家累世
奉我者也故赦焉一見一え一た一是此伊太祁曾神の須佐
大神一任一奉一り一せ御在一坐一す證一ふ一り其御罰の御事を
嚴重一沙汰一為一させ給一へる是實一小五十猛神一と御名一小

負せる神威の猛く渡りせ給ふ小因れり或書小伊太
祁曾宮御屋根大破ふ及びたりしりり去年紀伊殿より
り菅替の事を命ぜらる御社三所の内二社ハ菅替へ
一社ハ然るに損ハれり故に前方のを替て後
ハ又破れたりしむ時小ころとて残りたりしつら小其程
其事小預らる役人共城下より行通ハむ事ハ道遠く
て中に煩さけれハ何れも其拜殿をあむ假し宿所
そハ定めたりけりし事訖てけれハ明日ふむ若山より
出立むと為り寝たりけりし程こり有けれ其夜山中震
動のきて波菅残りたりしつら古き屋根を引放ちて其

拜殿ふ臥たりし人共の上へ打附たりけれハ皆魂を
失ふしつら屈まひ居たりけりし小明難きと頃漸に其
震動も止まりけれハ見る小屋根の残り所ハ一枚も
無く皆く打剥し給へり此小因りて去年二月江戸
へも注進し紀伊殿へも申達しけれハ早く修理り仕
奉ら可き仰事有き先に其事小係りつら役人共ハ命
辛くあて歸り甚く神威を恐惶し待りと有りと斯
小神に一き事の御在し坐ハ五十猛神の五十猛神
たり所あり小大ハ洲國を悉く青山と成させ御在
し坐て有功之神と称奉られさせ給へらむし甚もと

二尊く辱き御事ありけり
右の或書ハ新井君美と安積澹泊との新安手簡子載
 たり紀藩佐治理平治之云が手簡ありを今其意を少
 りも違ハす此方の語直して引らあり備上五十七
 下子引ら肥前風土記子拵島山三神御在し坐す中
 の御子神と申す此五十猛神と聞えたり一各軍
 神動則兵興矣と有ふと右等の事共と等しく御父
 大神の健く速き神性を受奉りて給へるが故と
 けり有べり神階の御事ハ文徳天皇実録子嘉祥三年冬
 十月乙巳朔壬子授紀伊國伊太祁曾神從五位下甲子
 遣左馬助從五位下死朝臣貞守向紀伊國伊太祁曾神
 社策命曰天皇我詔旨止申給久御冠授奉止祈申賜之
 依天從五位下乃御冠上奉利崇奉苗狀御位記
 令持天奉出須此狀聞食天皇朝廷常磐堅般也

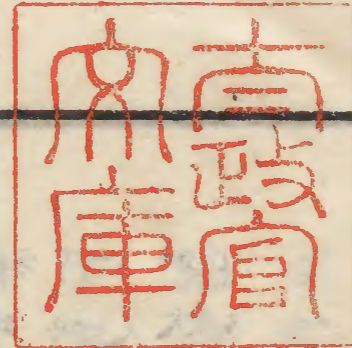
護奉賜止申給久申と見え三代實録子貞觀元年正月
 二十七日甲申奉授紀伊國從五位下勳八等伊太祁曾
 神從四位下元慶七年十二月二十八日庚申授紀伊國
 從四位下伊太祁曾神從四位上と有り然る子紀略子
 ハ延喜六年二月七日授紀伊國從五位下伊太祁曾明
 神從五位上と有ハ心得ぬ事あり己尔元慶子從四位
 上子て御在し坐す物を其より昇き御位子下し奉り
 可き謂無ハ誤る事論を待ず本國神名帳ハ正
 一位勳一等伊太祁曾大神と有ハ代々を経て増加奉
 れる御位の積りあり社傳ハ一條院天皇永祚元年八

月三日三箇の日並び出て後又一箇と成り同十三日
 より芝捲シバマキと云ふ大風起りて人畜草木を損二事夥し
 りりければ即此伊太祁曾神社に勅使を立ふれ風鎮
 の御祈有しうが大風立所止て人民の愁無りし程
 六十六箇國より國毎に一騎宛都て六十六騎の流
 鎬馬を奉るれ此よりして歳々急事無し今日九月
 十六日の神事六十六騎の流鎬馬有ハ永祚元年の
 風祭の遺風ふりと云り予嘉永六年二月十日詣て見奉る本社の五十猛命小
 て左右大屋都比賣神都麻都比賣神の二社御在し
 坐て神境も甚廣く大し然す御山の甚神の宮處ふ
 木立の物古りたらし御社の御隆えい古ハ甚く芳ふ
 此のふり然れども御社の御隆えい古ハ甚く芳ふ

せ御在し坐けあらず心苦しきや其ハ右引地神
 本紀も則紀伊國造斎祠神也と有て當國はてハ日
 前國懸兩太神宮に亞てハ甚止事無き大神ふむ
 渡り産土神より御在し坐て天下ハ比無き有功之
 郷の産土神より御在し坐て天下ハ比無き有功之
 神の御神の御為に瀆不ろりけれ此天下に無き有
 り人ハ皇華外夷の差別無く家内に住と任む限り
 此大神の御靈に漏奉
 此大神の御靈に漏奉
 此大神の御靈に漏奉

永祚元年二月十日...

右安政六年三月二十四日始同至四月十八日功成



[Faint, mostly illegible text in the background, possibly bleed-through from the reverse side.]

明治七年七月二十日校合之菅次史

